HIRATSUKA CITY LIBRARY
(http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/library/)

まいぶ

2003年3月　　第５３号
中央図書館 TEL(31)0415/北図書館 TEL(53)1232/西図書館 TEL(36)3555/南図書館 TEL(21)3080

福住（ふくずみ） 正兄（まさえ）（1824～1892）

略年譜

文政 7年（1824） 8月21日　相模国大住郡片岡村（現、平塚市片岡）にて名主・大沢市左衛門の五男として誕生。幼名は政吉。
文政10年（1827）　南金目村の名主・森勝五郎の養子となるが後に養父母の死により実家へ戻る。
天保 元年（1830）　儒者・千賀桐陰の教えを受ける。
天保 9年（1838） 9月　二宮尊徳に会う。
天保10年（1839） 3月　農業に従事する。
天保13年（1842）　農業をやめ医学を学ぼうとするが、父より報徳（二宮尊徳）を学ぶよう諭される。
弘化 2年（1845）10月24日　江戸へ行き二宮塾に入る。
弘化 4年（1847）　尊徳が東郷陣屋詰となり、正兄も同陣屋へ行く。
嘉永 3年（1850）10月　二宮塾を退塾し、箱根湯本の福住家の養子となる。
12月25日　結婚し10代目福住九蔵と改名
嘉永 4年（1851）10月　病床の尊徳を見舞う。「報徳克譲増益鏡」と題する書籍と、報徳善種金100両を賜う。
11月　湯本村名主となる。
11月15日　小田原藩士・吉岡信之へ入門。国学・和歌を学ぶ。
安政 3年（1856）　箱根14ヶ村取締役を命ぜられる。
慶応 元年（1865）11月　村政への功績大により藩主より賞せられる。
明治 2年（1869） 1月15日　小田原藩へ建白書を提出。学校を設立し、国学を教えることを建議。
明治 4年（1871） 6月 9日　小田原藩士となり、国学を教授（国学一等助教）する。家督を長男に譲り、以後福住正兄と称する。
明治 5年（1872） 2月 3日　藩校を共同学校と改称し、学校吟味役となる。報徳教会を設立し、権少講義を命ぜられる。
明治 6年（1873）　「富国捷径」初編を刊行。
明治 7年（1874）　「報徳教会道しるべ」を刊行。「富国捷径」2編と3編を刊行。

↑福住正兄肖像
「一枚の古い写真
-小田原近代史の光と影-」
小田原市立図書館

↓福住旅館
「かながわの建築物 100 選」写真集
神奈川県都市部建築指導課　1991 年

明治　8年（1875）　「富国捷径」4編を刊行。
小田原・湯本間の道路開削工事着手。
明治　9年（1876）　2月　人力車が湯本に入る。
明治12年（1879）　旅館新築落成
明治15年（1882）　馬車の開業
明治17年（1884）10月　「二宮翁夜話」第1巻刊行。以後毎年刊行し、明治20年（1887）6月第5巻を刊行し、正編完結する。
明治18年（1885）　「富国捷径」首巻を刊行。
明治21年（1888）10月　馬車鉄道開業（国府津・湯本間）
明治25年（1892）　5月20日　永眠。享年69歳

福住正兄の著書（写真左から）
「訳註　二宮翁夜話（上）」（1970年）
「訳註　二宮翁夜話（下）富国捷径（抄）」（1958年）

福住正兄は、文政7年（1824）8月21日、相模国大住郡片岡村（現、平塚市片岡）にて名主・大沢市左衛門の五男として誕生。幼名は、政吉といった。同10年（1827）4歳の時、隣の南金目村名主・森勝五郎の養子となったが、養父母の死に伴い実家へ帰った。

↑福住正兄生家「平塚市図録平塚市制40周年記念誌」

天保元年（1830）正兄7歳の時、遊歴の儒者・千賀桐陰（チガトウイン）を大沢家と森家（勝五郎の分家で森文右衛門）で雇い、教えを受けた。同4年（1833）と同7年（1836）は、天保の大飢饉といわれ、農村の荒廃は極度に達した。片岡村もその例外ではなく、この飢饉により戸数57戸の農家が49戸に減った。この時、市左衛門は村の建て直し法として、加藤宗兵衛（伊勢原の老舗・茶加藤の先祖）より報徳仕法が効果的であると勧められた。同9年（1838）4月10日、駿河国駿東郡竈新田村（現、御殿場市）の小林平兵衛は、市左衛門、加藤宗兵衛を連れて二宮尊徳を訪ねたが、両名は、深い感銘を受け尊徳の門に入った。この時尊徳が、市左衛門に指導した報徳仕法（建て直しの方法）は、次のとおりであった。村民の中から精農家5人を選ばせ、1町歩から2反歩までの土地を無年貢（領主、地頭への年貢は大沢家が負担）で貸し付け、その他の農民についても質入れ物件を引き出し、金の都合がつき次第支払うということで元の持主に返した。こうして片岡村の復興ができたが、同14年（1843）11月8日市左衛門は病没した。

一方、正兄は、農業は苦労の割に実が少ないと悩み、医者となり貧民を救いたいと思うようになり、父に話すが、父より「上等の医者は国を治す、中等の医者は人間を治す、下等の医者は病を治す。今、国を癒す大変な医者がいる。それが二宮先生だ。二宮先生は上医だ。」と諭された。

弘化2年（1845）10月、正兄は二宮塾へ入門。正兄21歳の時であった。同4年（1847）尊徳が、東郷陣屋（現、栃木県真岡市）詰となると正兄も遅れて同陣屋へ行き、師の世話をした。この時尊徳から受けた教えを書きとめたのが「如是我聞録」であり、これを基に後に「二宮翁夜話」ができた。嘉永3年（1850）10月正兄は、箱根湯本の福住家へ養子に入るため、尊徳のもとを去り、相模国へ帰った。同年12月25日結婚し家名を相続し、10代目福住九蔵が誕生した。

尊徳は、嘉永4年（1851）大沢家の行なってきた努力（片岡村仕法）を高く評価し、「報徳克譲増益鏡」という書籍と報徳善種金100両を添えて正兄の兄弟に与えた。また、大沢家が中心となって克譲社を設立した。克譲社とは、尊徳の教え「分度・推譲」の精神に基づき組織されたものである。「分度」とは、自分の財産に見合った生活をすること、「推譲」とは、分度以上の収入を得た時は、他人に譲ったり、将来に備えて貯えることをいう。克譲社は、明治に入り度重なる混乱により廃社同然となったが、明治15年（1882）片岡、土屋、南金目、真田を中心に報徳会克譲社として再出発した。

さて、正兄が養子に入った福住家は、旅館業を営み、さらに湯本村の名主を世襲していた家であったが、先代九蔵が天保9年（1838）に類焼を受け、家を維持できず、家出し離縁の状態であった。そこで正兄は、まず福住家の再興をはかり「分度」による支出の減少と収入の増加、旅館の絵図面を印刷・宣伝し、正直・安価・公平に努めた。こうして家業は繁昌し、嘉永4年（1851）11月、正兄は、27歳で湯本村の名主となった。借金返済に苦しむ村民に対しては、報徳仕法により無利息金を貸し、暮し向きを建て直すよう指導した。

明治に入り、同4年（1871）家督を長男に譲り、これ以後、福住正兄と改名する。旅館を石造り3階建てに建て替えると同時に、観光地箱根の近代化のために種々の事業に着手した。同8年（1875）小田原・湯本間に馬

車、人力車が通れるように道路開削工事を始めた。この道路工事を正兄に話しかけたのは福沢諭吉であり、具体化して勧めたのは足柄県知事の柏木忠俊であった。諭吉は、湯治のため箱根塔之沢・福住（福住喜兵治）に滞在中に「足柄新聞」第6号に「箱根道普請の相談」という記事を発表。この内容は、箱根近代化のためには、昔のままの荒れ放題の道を改修することが急務であると提言している。以下その全文を紹介します。

箱根道普請の相談

人間渡世の道ハ眼前の欲を離れて後の日の利益を計ること最も大切なり、箱根の湯本より塔の沢まで東南の山の麓を廻りて新道を造らハ、往来を便利にして、自然ニ土地の繁昌を致し、塔ノ沢も湯本も七湯一様ニ其幸を受くへき事なるに、湯場の人々無学のくせに眼前の欲ハ深く、下道の仮橋も去年の出水ニ流れしまゝに捨置き、わざわざ山路の坂を通行して、旅人の難渋ハ勿論、つまる処ハ湯場一様の損亡ならずや、新道を作るに其入用何程なるやと尋るに、百両に過ずと云り、下道のかりばしハ毎年二度も三度もかけて一度の入用拾両よりも多きよし、拾両ツ、三度ハ三拾両なり、毎年三拾両の金ハしぶしぶ出して一度に百両出すことを知らず、ばかともたはけとも云はんかたなし、ましてこの此節の有様にてハ其拾両も出しかねて、仮橋もなく通行ハ次第ニ淋しくなりて、宿屋もひまなる故、まれに来る二三人の客を見れバ珍らしそうに此をとりもち、普代の家来が主人ニ目見せし如く首ばかりさげて、僅ニ壱分か弐分の金をもふけ、家業繁昌ありがたしと悦ひをるもあまり知恵なきはなしならずや、此度福沢諭吉が塔の沢逗留中、二十日はかりの間に麓の新道を造らバ金拾両を寄附すへきなり、湯屋仲間の見込如何

明治六年三月十六日　塔の沢福住にて福沢諭吉記ス

←（明治27年）馬車鉄道の湯本付近の絵「目で見る小田原の歩み」小田原市

明治9年（1876）2月には、人力車が湯本に入り、同15年（1882）には、馬車の開業もあった。さらに、同20年（1887）7月、正兄ら有志7名は、馬車鉄道（国府津～湯本間）敷設の請願書を神奈川県に提出し翌年10月に馬車鉄道が開通した。

正兄の最後の仕事は、尊徳の贈位と報徳二宮神社の創建であった。明治24年（1891）夏、正兄は箱根に来ていた内務大臣・品川弥二郎に尊徳の業績や思想を話し、品川は、尊徳顕彰に尽力することを快諾した。こうして同年11月16日に尊徳への従四位贈位の発表があった。また、神社創建については、同25年（1892）4月、小田原報徳二宮神社創立願を神奈川県に提出したが、5月20日午後10時5分二宮尊徳の高弟の一人福住正兄は、その生涯を閉じた。享年69歳。同月23日早雲寺に埋葬。正兄の遺志となった神社創建は、9月12日付けで神奈川県知事の認可を得、同27年（1894）4月完成。大正5年（1916）5月正兄の遺業を偲んで報徳二宮神社拝殿の参道北側に頌徳碑「報徳克譲」を建立。同13年（1924）2月正兄に従五位が贈られた。

↑「青年」　森鴎外/著
新潮文庫

終わりにあたり、福住（萬翠楼福住）が舞台となった文学作品として、明治の文豪・森鴎外の「青年」がありますので、これを紹介して筆を置くこととします。この作品は、地方から上京してきた小泉純一を主人公に設定。彼は、資産家の息子で就きたい職業がなく、因習を嫌い立身出世にも背を向けて小説家を志す。友人も何人かできるが、若い未亡人・坂井夫人と出会い、心をひかれる。そして、夫人が年末に箱根の福住へ行くので後で来るように誘われる。行くか行くまいか悩んだ末、急に夜行くことを決心する。新橋21時発の急行で国府津へ行き、ここで一泊。翌日、鉄道馬車にて湯本へ到着。福住ではなく別の宿に泊まり、外へ出て散策中、偶然坂井夫人と出会い、今夜福住へ来るように再度言われ行くが、そこには同伴者がいて純一は、不愉快となり夫人への面

当てのため席を辞す。翌元日純一は、帰京の途につくが、夫人と別れる寂しさの中から、作品を書こうと決心する。この作品は、一人の青年の内面の成長過程を追求した小説であるが、ドイツ文学者の高橋義孝氏が、新潮文庫の解説欄冒頭で指摘しているように、一回の通読ではなく、じっくり何度か読まないと鴎外の言わんとしていることが、理解できない。

(参考文献)

「福住正兄翁伝」改訂版	佐々井信太郎／著	報徳文庫	1991年
「日本の創造力」1		日本放送出版協会	1992年
「福沢諭吉と福住正兄」	金原左門／著	吉川弘文館	1997年
「二宮尊徳とその弟子たち」	宇津木三郎／著	夢工房	2002年
「箱根路歴史探索」	岩崎宗純／著	夢工房	2002年
「平塚市史」6　資料編近代2		平塚市	1995年
「小田原市史」史料編　近代1		小田原市	1991年
「かいびゃく」平成2年11月号		一円融合会	
「かいびゃく」平成4年1月～12月号		一円融合会	
「かながわ風土記」昭和59年3月号		丸井図書出版	
「広報ひらつか」昭和39年9月、49年11月、50年1月		平塚市	
「おだわら　歴史と文化」4		小田原市公益事業協会	1990年
「東京新聞」平成14年3月31日			

おすすめ！

「いもころがし」

川崎　大治　作
前川かずお　画
童心社

ある寺に、鼻の悪いおしょうさんがいた。三人の小僧に、「なんでもワシのやる通りにせよ」といいつけられた小僧さんたちは、ご飯のときにうっかり、いもをころがしたのも、まねをする始末。和尚さんは、ナンミョウホウレンゲンキョウとお経を読んでも、ナンミョウホレンヘヒョーと聞こえる。　そこで、また小僧さんたちは、、、

「行ってみたい全国の博物館」

阿部　和江／編　　文園社

いま、どこへ行っても、博物館、資料館、美術館がたくさんある。本書は全国版でありますが、都道府県別に索引があるので、どの施設に行けば、どのような文化財が見られるか、ヒントを与えてくれるガイドブックです。

「なめれおん」

あきやまただし　佼成出版社

なめれおんくんは、なんでもなめるとなめたもののいろにかわっちゃうというふしぎなかめれおん。

でもなめたもののいろにかわるので、なめれおんくんというんだ。

まいにちなにかをなめていろいろないろにかわるが、やっぱりおかあさんいろがすきだという。

かめれおんくんが、いろがわりするのとおなじくページをめくるとやわらかいいろづかいで、つぎはなにいろにかわるのかなと、きたいをもたせるたのしいえほんです。